

青森市の新町通りを走る馬そり、食堂の店先で髪を切ってもらう子ども、青函連絡船から降りてきたかっぎ屋の女性たち。1950年代、写真雑誌『カメラ』

(アルス)や『アサヒカメラ』(朝日新聞社)の誌上コンテストでは青森市の写真家・工藤正市さん(1929〜2014)が撮影した写真が注目を集めていた。

正市さんは1946(昭和21)年、東奥日報社に入社し、カメラマンとして働きながらコンテストに作品を投稿していた。「働く

人々」や「生活」をモチーフとした作品は土門拳や木村伊兵衛、濱谷浩といった写真家から高い評価を受けた。

1953(昭和28)年には『カメラ』の月例欄(選者は土門と木村)に作品が次々と入選し、入選回数によつて決まる年間ベストテンの1位に選ばれている。しかし、1960年代に入ると次第に仕事との両立が難しくなり、コンテストに作品を投稿することはなくなったそうだ。

そんな正市さんの写真が2020(令和2)年春に

再び注目を集めた。長女の加奈子さん(東京都在住)が写真共有サービス「インスタグラム」に正市さんの写真を投稿したところ、国内だけでなく海外からも多くの反応が寄せられたのだ。

加奈子さんは夫とともに正市さんが残した大量のネガフィルムを整理し、デー

「生活」をテーマに

撮影した写真家

工藤正市さんの作品から

村上 亜弥

(青森市民図書館
歴史資料室職員)

タ化を進めていた。そして、その作品を多くの人に観てほしいとの思いから「インスタグラム」への投稿を始めたという。

その後、青森市民図書館歴史資料室では青森県内で正市さんの写真展を開催したいという加奈子さんの思いを受け、2021(令和3)年3月、リンクモア平安閣市民ホール(青森市民ホール)において「工藤正市写真展」を開催した。この写真展には多くの市民が足を運び、歴史資料室には自分自身や家族の姿を発見したとの声も寄せられた。

さらに2021(令和3)年9月には写真集『青森1950-1962』(みすず書房)が刊行され、青山ブックセンター本店(東京都渋谷区)では年間ランキング10位となった。書店で見かけたという方、既に手元にあるという方もいらっしゃるのではないだろうか。

さて、ここで正市さんが撮影した写真の中から青森市の新興街(現ニコニコ通り)で撮影された1枚を紹介したい。幼い兄弟を背負

い、商店街を歩く子どもたちの姿を捉えた写真である。子どもたちは夕食の支度などで忙しい母親に代わり、兄弟の面倒をみながら遊んでいる。1950年代にはよくみられた光景だろう。

正市さんは子どもたちとともに商店街や路地を歩き、家に帰るまでの様子を写真に収めた。写真雑誌『日本カメラ』1956年1月号に掲載された入選作品「子守の時間」と同じ日に撮影された1枚と考えられる。

正市さんは「子守の時間」という作品について「いつも変らないのは庶民のささやかな生活でしょう。男の私にも子守では遠い思い出のあることです」と語っている。「庶民のささやかな生活」にカメラを向けた正市さんの写真から、私たちは当時の青森県民の暮らしを知ることができる。ぜひ「インスタグラム」や写真集で正市さんの作品に触れ



青森市の新興街(現ニコニコ通り)を歩く子どもたち
=1955(昭和30)年頃・工藤正市さん撮影・
工藤加奈子さん提供